

2023.6.10

寺沢薫『卑弥呼とヤマト政権』について

清水徹朗

寺沢薫『卑弥呼とヤマト政権』(2023)

第1章 纏向遺跡論

1. 纏向遺跡とともに
2. 纏向大王都論

第2章 日本国家の起源を求めて

1. 国家と戦争
2. 歴史的國家の起源

第3章 王権誕生への道

1. 「倭国乱」の実像
2. ヤマト王権誕生と邪馬台国

第4章 王権の系譜と継承

1. 「ヤマト優越史観」批判
2. 前方後円墳祭祀の本質と系譜

第5章 卑弥呼共立事情

1. 卑弥呼共立の舞台裏
2. 倭国の女王卑弥呼の政権

第6章 卑弥呼とその後

1. 女王卑弥呼の実像
2. 『魏志』倭人伝と『記紀』のはざままで



盟主不在の「倭国乱」ののち、三世紀初頭、**卑弥呼を初代大王として奈良盆地東南部の纏向の地にヤマト王権は誕生した**。本書では纏向遺跡から出土した数々の遺構と遺物を詳細に紹介し、この遺跡がヤマト王権の最初の大王都だったことを明らかにする。王権はいかなる背景のもとに、どのような経緯をへて成立したのか。考古学の成果と中国史書の精読から導き出された、東アジア世界におけるこの国の国家形成史の新しい枠組みを提示する。

寺沢 薫

- 1950年 東京葛飾区で生まれる。現在、73歳。
1973年 同志社大学文学部卒、千葉市職員(文化財係)
1976年 奈良県橿原考古学研究所に入所
1995年 シルクロード学研究センター
2002年 奈良県教育委員会文化財保存課主幹
2005年 橿原考古学研究所調査研究部長,総務企画部長
2011年 橿原考古学研究所を退職
現在、 桜井市纏向学研究センター所長
同志社大学・奈良大学非常勤講師

[主著]

- 『王権誕生』(2000)
『王権と都市の形成史論』(2011)
『弥生時代の年代と交流』(2014)
『弥生時代国家形成史論』(2018)



[プロローグ]

纏向はヤマト王権の最初の大王都

「邪馬台国と卑弥呼には近づくな！」
……1970年代の考古学界の風潮

「考古学は歴史の解釈や叙述に積極的になるべきでない。」

1960年代……第1次邪馬台国ブーム

← 魏志倭人伝の解釈、作家(松本清張、宮崎康平等)が参加

1980年代……第2次邪馬台国ブーム

← 吉野ヶ里遺跡の発掘

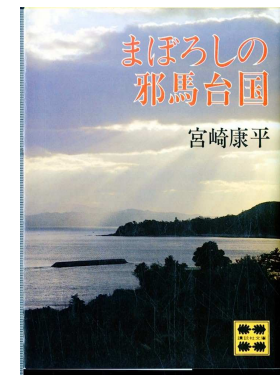
寺沢氏は纏向遺跡が「ヤマト王権」の最初期の政治的中枢であることを真っ先に明確に主張

「女王卑弥呼は纏向遺跡にいた。」……『王権誕生』(2000)

「考古学から得られた知見をもとに最も合理的で精緻な歴史像を組み立て、そのうえで文献との整合性を逐一検証する。」



1964年



1967年

第1章 纏向遺跡論

- 1971年 寺沢氏が初めて纏向遺跡の発掘現場を見る（当時 同志社大学3回生）
- ・ 森浩一氏 [当時榎原考古学研究所指導研究員] とともに見学
 - ・ 当時、石野博信氏が発掘に参加していた
- 1972年 石野博信「古代纏向川の調査」
- …「纏向式」を弥生時代後期末でなく古墳時代開始期と主張
 - 土師器の初現や時代区分を巡る論争が盛んになる
 - ・ 寺沢氏は大学卒業後、千葉市の文化財係学芸員として働いていたが、3年で関西に戻り、榎考研に入所（嘱託）。関川尚功氏が同僚。
 - 纏向石塚古墳の調査に参加……箸墓古墳より古い築造
- 1976年 箸墓古墳の出土品が公表される（宮内庁）
- 特殊器台……岡山県楯築墳丘墓でも発掘
- 石野博信・関川尚功編『纏向』→纏向遺跡が注目を集める
- 1979年 寺沢薫「大和弥生社会の展開とその特色」
- 纏向遺跡は大和弥生社会の内部的発展の延長ではなく、外部勢力が加わって出現したもの。
- 1984年 寺沢薫「纏向遺跡と初期ヤマト政権」
- 纏向遺跡の「建物」は政治的祭祀的色彩の強い建物
＝ヤマト王権の最初の政治的中枢

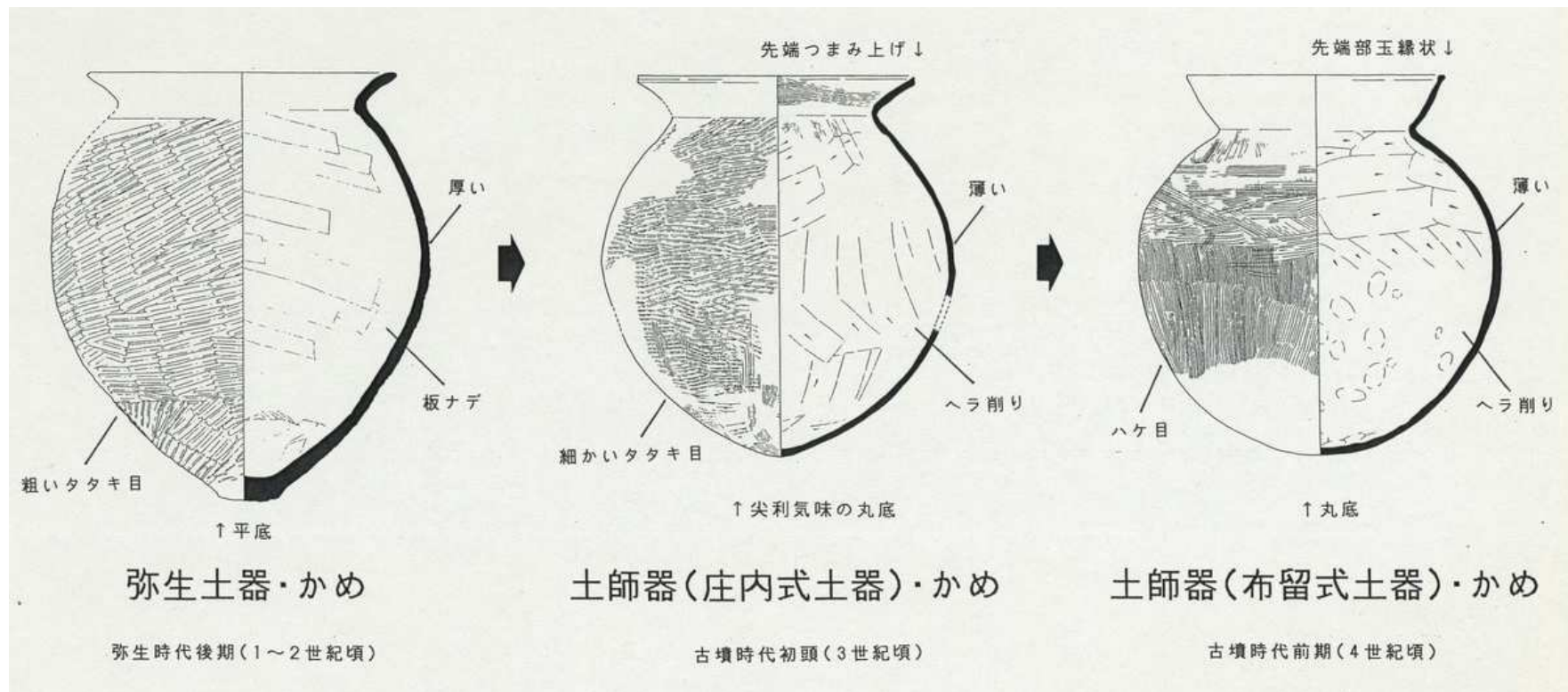
その後、土器の様式編年作業に取り組む

……時間の経過とともに変化する「形式」をタイムスケールとして使う

庄内0式期（纏向遺跡出現期）…… 3世紀初め

庄内3式期～布留式期…… 3世紀中頃

← 田中琢「布留式以前」（1965）……初めて「庄内式」を提唱



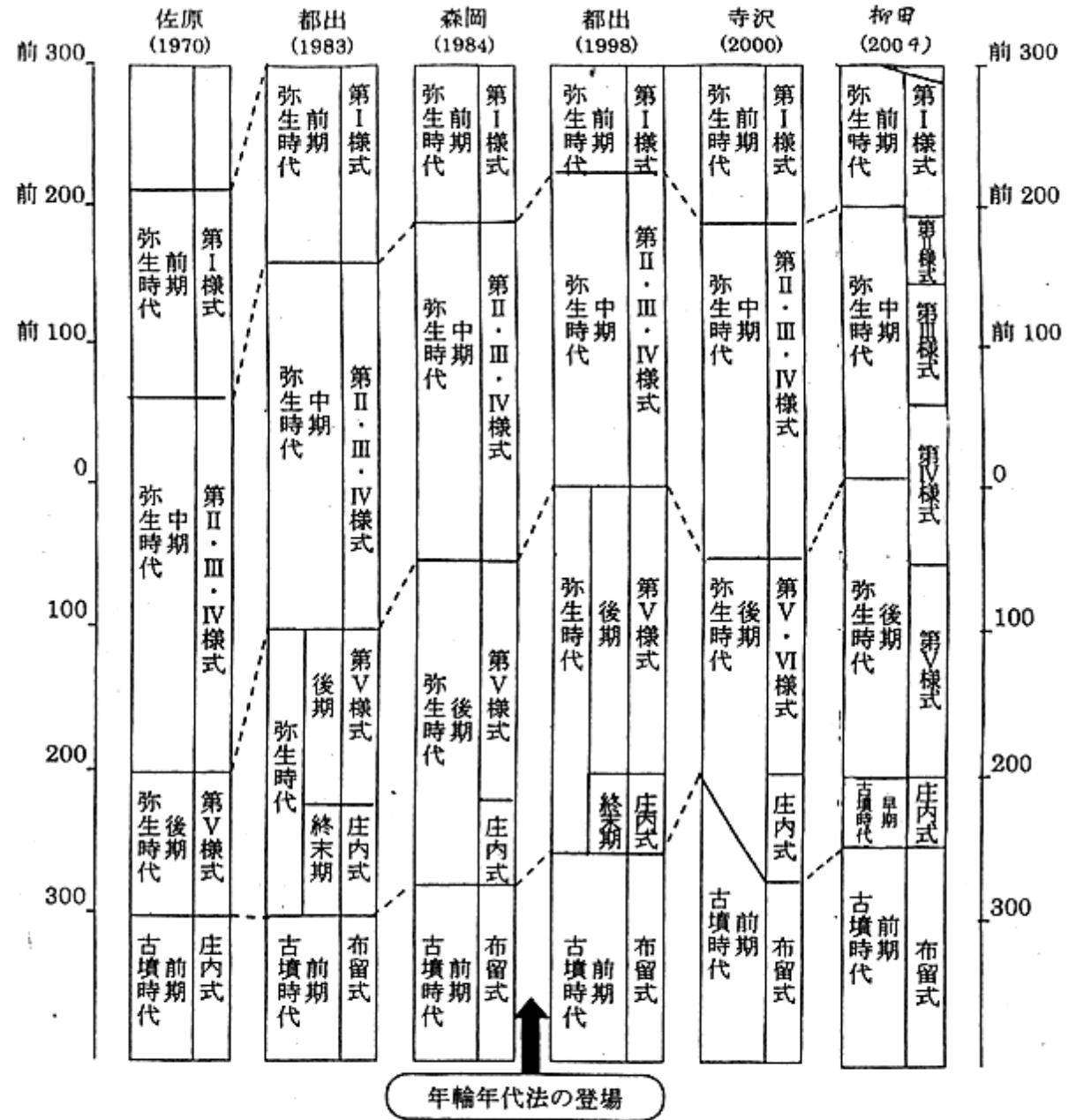
近畿地方 土器年代比較表



庄内式土器



布留式土器



鷲崎弘朋「炭素 14 年代法と邪馬台国論争」〔季刊邪馬台国〕100 号) 中の表をもとにし、柳田康雄「日本・朝鮮半島の中国式銅剣と実年代論」〔九州歴史資料館研究論集〕29) 中の表の年代を書き加えたもの。

寺沢氏は放射線炭素、年輪年代、酸素同位体による年代測定には批判的

「科学的で正確だとして無批判に採用されていく風潮」

「考古学的方法による成果と自然科学的方法による結果をクロスチェックしていく検証途上の段階にある。」……石塚古墳の築造時期を巡る論争は未決着

「年輪年代の測定値と土器様式の暦年代との整合性は未確立」

「放射線炭素による年代測定値は較正が必須」

[箸墓古墳] 全長290m、後円部の高さ28m

初期前方後円墳（円筒埴輪がない、前方部が撥型に開いている）

1994年 大池の改修工事の際、周辺部を調査

箸墓が布留0式古相期であることが判明





纏向型前方後円墳は全国に分布（宮城から九州まで）

← ヤマト王権との政治関係があった

卑弥呼の治世と纏向型前方後円墳の重なり

纏向遺跡は3世紀の初めに忽然として現れた……庄内0式という時期

奈良盆地の集落遺跡…小共同体（23群）、大共同体（部族的国家〔クニ〕）（11）

拠点集落……共同体に属する人々の血縁・地縁の拠り所

二重の環濠、大型の据立柱建物（祭殿）

唐古・鍵遺跡…ヤマト国（奈良盆地東南部）の首都、畿内有数の物流センター

マツリの場面を描いた器が多数出土、楼観を描いた土器

纏向遺跡……自然林に覆われた空閑地に突如として出現

・ 弥生時代の集落遺跡がない、・ 計画集落・都市、農耕集落ではない

纏向の登場と同時に唐古・鍵遺跡が衰退

← 外部の諸勢力の意思が強く働いた結果



唐古・鍵遺跡

内外から多くの集団が集まった（強制的に集められた）

……在地勢力の発展によるものではない

纏向遺跡には他の地域から搬入された土器が異常に多い（全体の15%）

瀬戸内海沿岸部、山陰、北陸、東海等（東海が全体の43%）

各地域の出先機関が存在していた

3世紀の倭国内における政治的中心地

水田や農業にかかわる遺構は発見されていない、イネ花粉はみられない

発見された大溝は運河、出土した鋤は農耕用ではなく土木用

ベニバナ、バジル ← 中国との交流

絹製品……天蚕による最古の国産絹製品の可能性

前方後円墳の出現

狐帯文を刻んだ呪具が石塚古墳から出土……キビでも出土、陰陽思想の影響

火と水の祭儀……新嘗、食国儀礼

特殊な建物群……崇神（10代）、垂仁（11代）、景行（12代）の宮

まきむく = 真木+無垢……神聖、清浄の意味

纏向遺跡……古代ヤマト政権の政治的拠点である大王宮が最初に置かれた場所

= 古墳時代の始まり → しかし、100年で急速に消滅

森浩一（1928－2013）

大阪市生まれ。同志社大学卒。学生時代から古墳の発掘調査に参加。高校教師、関西大学講師を経て65年に同志社大学講師に就任（72年に教授、99年退任）。著書多数。「天皇陵」について問題提起を行った。

石野博信（1933－ ）

宮城県石巻市生まれ。関西大学で考古学を学び、兵庫県教育委員会を経て、71年に橿原考古学研究所に入所し、纏向遺跡に発掘に取り組む。橿考研博物館長、兵庫県考古博物館長、徳島文理大学教授等を歴任。

関川尚功（1951－ ）

長野県生まれ。関西大学史学科卒。74年に橿原考古学研究所に入所し、約40年間、奈良の遺跡、古墳の発掘調査に従事。2011年に橿考研退職。『考古学からみた邪馬台国大和説』（2020）で畿内説を全面否定。

田中琢（1933－2022）

滋賀県生まれ。京都大学文学部（修士課程）を卒業後、59年に奈良国立文化財研究所に入所し、平城京木簡の発掘調査等に従事。94年に同研究所の所長となり、99年に退任。『倭人争乱』（1991）を執筆。

佐原真（1932－2002）

大阪市生まれ。大阪外国語大学を卒業後、京都大学大学院で考古学を学び、64年に奈良国立文化財研究所に入所して、約30年間、遺跡の発掘調査に従事した。特に、銅鐸に関する研究で優れた業績をあげ、93年に国立歴史民俗博物館の副館長に就任し、97年から4年間館長を務め、2001年に退任。邪馬台国畿内説を支持し、江上波夫の騎馬民族国家説を批判した。

直木考次郎（1919－2019）

兵庫県生まれ。京都帝国大学史学科卒。大阪市立大学教授、岡山大学教授等を歴任。戦後の古代史研究をリードし、邪馬台国畿内説を唱えた。主著に『日本古代国家の構造』（1958）、『古代国家の成立』（1965）、『邪馬台国と卑弥呼』（2000）などがある。

春成秀爾（1942－ ）

兵庫県生まれ。岡山大学史学科卒。九州大学大学院で考古学を学んだ後、岡山大学講師を経て、81年より国立歴史民俗学博物館に勤務。97年に考古研究部長に就任し、08年に退任。炭素14年代法を使って、弥生時代が500年さかのぼるとした研究の中心人物。

第2章 日本国家の起源を求めて

日本列島で国家が誕生したのは7世紀末～8世紀初め……古代史研究者の大勢
701年 大宝律令（持統天皇の時代）

「日本」が国号とされたのは飛鳥浄御原令（689年）という説もある
倭国（わこく、やまとのくに）

エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』（1884）

階級の形成 → 「国家」とは二つの経済的階級の対立による社会崩壊を防ぐため闘争を調整する機関

- ① 地域による国民の区分
- ② 公的強力の設定と強化（警察、軍隊）
- ③ 租税の徴収
- ④ 官吏の存在

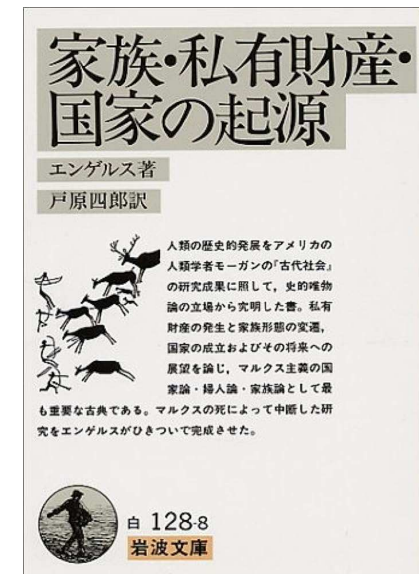
『ドイツ・イデオロギー』（1845－46）

『反デューリング論』（1878）

外的国家…共同体の共同の利益を守るため外敵を防御

滝村隆一『国家の本質と起源』（1981）

内的国家……………階級対立の抑制



戦争の起源・原因に関する研究……生存のための闘争本能の発現

可耕地の制約

勝者と敗者間の社会的支配の服従関係

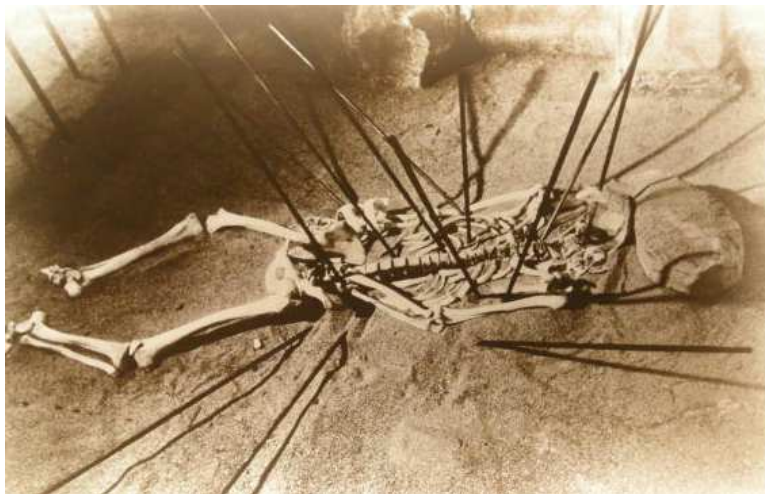
レーニン、スターリン……国家の強化の方向に進む

← 国家の死滅（マルクス）というバラ色の未来

カーライル（人類学）、ブレマー（政治学）、ダイヤモンド（進化生物学）

【戦争の始まり】

- ① 戦闘のための武器、防具
- ② 防御施設、情報網、命令系統
- ③ 戦争の証拠、殺傷された人骨



山口県土井ヶ浜遺跡



殺傷傷

日本列島には戦争は弥生時代に始まった（佐原真『日本・世界の戦争の起源』）
狩猟具が大型化、重量化して武器として使われる
朝鮮半島から青銅製の武器（剣、矛、戈）が移入される → 楯の出現
環濠集落……物見櫓、山城

「国家」と呼ぶべき政体は弥生時代の早い時期から誕生していた（北部九州）
外的国家 → 権力の維持・強化のため内的国家の充実を図る
政治的軍事的祭祀的な首長の出現……「部族国家」

北部九州の遺跡の例…… 2世紀に成立「クニ」
末盧国、早良国、奴国、イト国

AD57年 後漢が金印を下賜……「漢委奴國王」

107年 師升が伊都国の王たちをしたがえて朝貢



第3章 王権誕生への道

日本の国家形成……紀元前の部族的国家の誕生にはじまる

→ 北部九州で最も典型的な形で重層的発展をとげた

日本列島の他の地域では、部族国家の形成は漸進的で緩慢な形で進行

近畿地方……外部国家意志の発動である戦争は大規模化、頻発化することなかった。首長は軍事指揮官としての能力よりも、社会、経済面における指導力や祭祀における共同幻想の集約力と拡大が問われた。

農業生産の増大を願う銅鐸のマツリへの特化

民衆と隔絶した首長墓が存在しない

倭国乱の終息のため一人の女性（卑弥呼）を共立。

← 各地の首長たちによる会同と盟約の締結

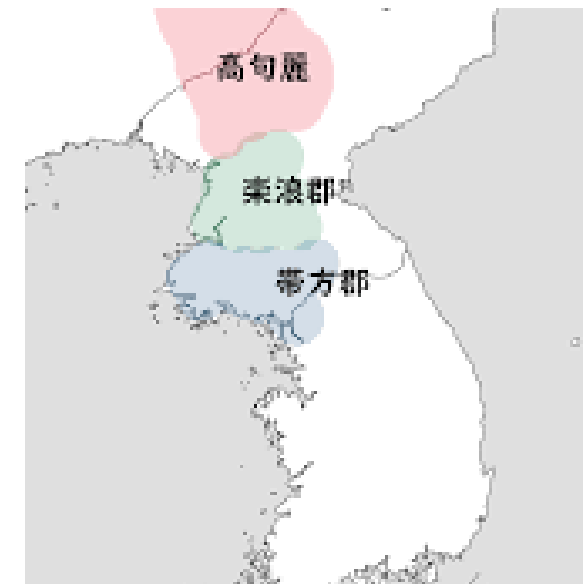
倭国乱は180年代……多くの研究者の共通の理解

師升（107年に漢に朝貢）……イト倭国の最初の王

帯方郡の設置（公孫氏） [204年の後]

→ 倭と韓は帯方郡に属す（209年）

卑弥呼共立は3世紀初頭



後漢王朝の混迷

107～119年 チベット羌（きょう）族の反乱

鮮卑族の侵入、高句麗の侵略

184年 黄巾の乱（太平道信徒の反乱） → 後漢滅亡 → 三国志の時代へ
公孫氏の台頭 → 帯方郡の設置（204年）

こうした動きが日本列島の政治的混乱に影響を与えた

北九州…銅矛、銅戈の巨大化、近畿…銅鐸が巨大化、装飾性を強める

出雲……独自の墳丘墓（四隅突出型方形墓）、吉備…楯築墳丘墓

丹波、越……それぞれ独自の発展、瀬戸内海沿岸部……第一次高地性集落

「倭人」、「倭国」の地域……広い地域に分布

→ 次第に日本列島に限定して用いられるようになる

ヤマト王権の誕生＝真生倭国、卑弥呼共立…… 3世紀初め

イト国を盟主とする倭国（2世紀初め）……北部九州から四国南西部までの地域

→ 2世紀末に混迷（倭国乱、公孫氏の圧力）

→ 3世紀初めに、奈良盆地東南部に新たな「ヤマト王権」が誕生＝纏向遺跡

部族的国家連合から王国へ飛躍

倭国の王都はイト国（三雲・井原遺跡）から纏向に東遷

＝女王卑弥呼の政権（←寺沢説は「異端」）

邪馬台国の所在地は「ヤマト」（奈良盆地）、卑弥呼の居処は纏向遺跡

邪馬台国位置論に発言力を持つのは考古学の資料

たかだか2000字足らずの漢文資料だけに頼った解釈は説得力がない

邪馬台国九州説は不毛

①卑弥呼、邪馬台国の遺跡は特定できていない

②土器の編年表、考古学的手法と自然科学的手法にもとづく暦年代論をきちんと論じていない

← 「九州説」は纏向遺跡を3世紀末と主張している

庄内0式土器、布留0式土器の年代観

考古学的手法による論理的な枠組みからすれば、邪馬台国九州説を主張することは限りなく困難である

直木考次郎……「やまと」という言葉の成立は3世紀頃までさかのぼると主張

白石太一郎……「王権」と「政権」を厳密に区別

ヤマト政権＝日本列島の広域を指す、ヤマト王権＝近畿中央部の政治勢力

寺沢氏の主張……日本列島は3世紀初めに「部族国家連合」の段階から「王国」の段階に達した

ヤマトの領域に政権中枢を置く広範な中央－地方の政治性関係が樹立された

新生倭国の祭祀的要素の強い王国＝卑弥呼の共立

「大王」という呼称もこの頃（3世紀初め）から使用すべき

第4章 王権の系譜と継承

「ヤマト優越史観」批判

ヤマト優越史観……多くの研究者の「常識」となっている
佐原真、春成秀爾に対する批判

奈良盆地の農業生産力と鉄器化に対する過大な評価

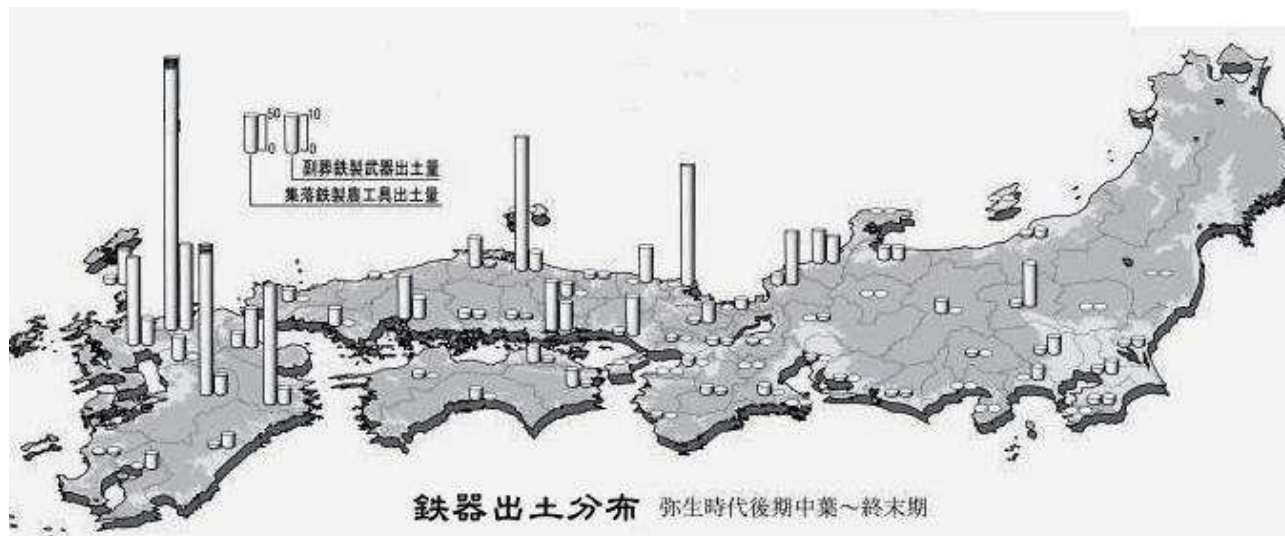
弥生時代の奈良盆地の農業生産力は他地域より大きかったという先入観

← 何ら客観性を伴わない絵空ごと、古代の米の収量は非常に低くかった

弥生～古墳時代初期の鉄器の出土量は圧倒的に九州が多く、奈良・畿内は非常に少ない。

畿内では、弥生時代後期に大規模環濠集落が衰退し経済的に停滞した

→ 畿内勢力が強大になってヤマト政権(王権)を生み出したとは言えない



三角縁神獸鏡は3世紀中頃のもの

畿内の弥生時代の遺跡からは中国鏡が一枚も出土していない

→ 畿内の前期古墳に副葬された中国鏡はヤマト政権成立後に外交ルートを通じてもたらされたもの

畿内の部族的国家の政治的・階級的要素の稀薄さ

岡山県楯築墳丘墓……2世紀末に築造

「王のなかの王」の墓、秘儀……首長権、祭祀権

イズモ、イト倭国の王墓 → ヤマト王権の前方後円墳に引き継がれる
王権の継承、国家の安寧と繁栄の祈求

「首長霊継承儀礼説」(近藤義郎、春成秀爾) …寺沢氏はこの説に賛同
折口信夫の大嘗祭論……天皇霊の継承、真床追衾



富雄丸山古墳出土



岡山県倉敷市楯築墳丘墓

第5章 卑弥呼共立事情

2世紀末の混迷するイト倭国体制

→ より強力で拡大した領域を持つ倭国体制（新生倭国）＝ 卑弥呼共立
イト国（北部九州）、キビ国、ハリマ、サツマ、アハ、イヨ、イズモの会同
前田春人の論文（2019）……卑弥呼共立の意義を論じる

公孫氏による帯方郡設置（204年）

→ 倭の外交窓口を一本化する必要

公孫氏が倭国再編と卑弥呼共立を背後で画策

倭国再編をリードするためのイト国連合、キビ国連合、イズモ国連合の3者

→ 王国の首都を新たに設置（＝纏向に移る）

イト国の東遷ではない

卑弥呼はイト国の人

ヤマトは日本列島の中心部にある（地理的位置）

奈良盆地には直前まで強力な政治権力や軍事力を持った部族的国家が存在していなかった

拠点的母集落はあるが、集落といえるほどのものさえ存在しない一空闲地であった纏向川扇状地

シンボルとしての三輪山……国つ神の統合神

「魏志倭人伝」には「女王国」が5回でてくるが、「邪馬台国」は1か所のみ、「倭国」は3回

「女王国」は「倭国」全体ではなく、大王都を置いた地理上の場を指していた
→ 卑弥呼は倭国の女王であり、邪馬台国の女王ではない

纏向遺跡の柱列が倭人伝の「城柵」

「楼観」は唐古・鍵遺跡の重層の建物

「大率」は伊都国に設置（監察機関）

東大寺山古墳（天理市）……「中平年」（AD184～188）の文字が入った銘鉄刀

→ 邪馬台国畿内説の一つの根拠

238年……公孫氏滅亡（魏が滅ぼす）

→ 卑弥呼が魏に遣使した年（難升米）……帯方郡 → 洛陽訪問

景初三年説と二年説、「銅鏡百枚」

三角縁神獸鏡……魏鏡説、国産鏡説

景初3年、正始元年問題

寺沢氏の見解……三角縁神獸鏡は日本で製作されたというほうが合理的

鉛同位体比分析

「邪馬台国連合」論の不毛…邪馬台国を盟主とするクニの政治的連合体など存在しない

第6章 卑弥呼とその後

女王卑弥呼（170年頃～248年）

70代後半で死去

霊能力、政治的カリスマ……鬼道、巫女

夫壻なし（独身）

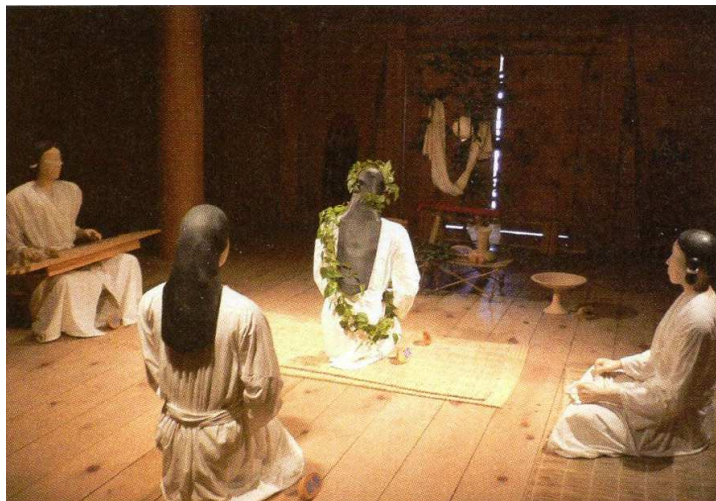
農耕のマツリ……銅鐸、穀霊、祖霊、アニミズム

卑弥呼……新生倭国の最初の大王、王権祭祀を執り行う最高祭司

中国の道教思想を取り入れる

ヒメ・ヒコ制……卑弥呼と男弟の関係

聖俗二重首長制（白石太一郎）



[白石太一郎]

1938年大阪市生まれ。同志社大学卒（博士課程）。橿原考古学研究所、国立歴史民俗博物館、奈良大学等を経て、現在、大阪府近つ飛鳥博物館館長。邪馬台国畿内説、箸墓古墳卑弥呼説に立つ。

箸墓古墳 「卑弥呼の墓」説 ……有力な説だが、疑問も多い

西殿塚古墳が壺与（台与）の墓

卑弥呼の死……「以て死す」……戦死説、敗死説、王殺し説

卑弥呼の墓……径は百余歩（144m← 1歩＝1.44m）

箸墓古墳

①布留0式古相期…… 3世紀中葉との有力な説＝卑弥呼の死亡時期と一致

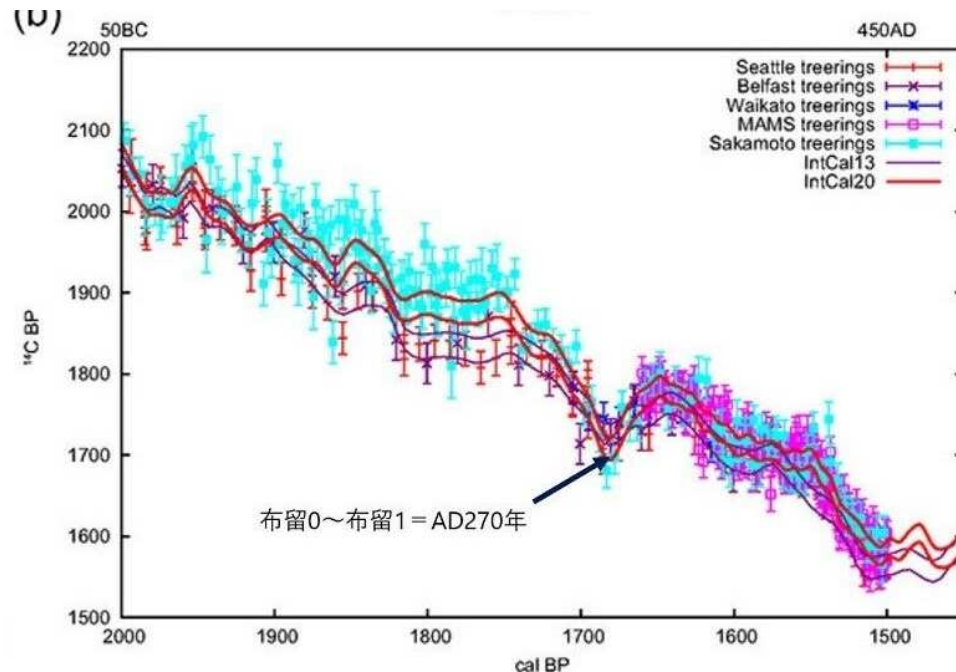
← 放射性炭素年代測定

②後円部の径が「百余歩」に近似

← ただし、後に箸墓の後円部は165mであることが判明

③倭迹迹日百襲姫と卑弥呼像が共通の点が認められる

…崇神の治世を助け三輪山の神の妻となった＝巫女王としての卑弥呼と共通



[寺沢氏の見解]

- ① 箸墓の築造は布留0式古相期に始まり、同じ古相期に終わっている
布留0式古相期の暦年代は3世紀後半
→ 卑弥呼の死亡時期とはずれている
……布留式は庄内式より新しい土器（土師器）
- ② 箸墓は後円部165m、前方部135mの前方後円墳であり、円墳ではない。
後円部先行説は無理がある。
……石塚古墳、矢塚古墳は卑弥呼の墓である可能性がある（有力候補）
ホケノヤマ古墳はやや小さく、被葬者は男性の可能性が高い

[箸墓古墳の被葬者]（3つの説）

- ① 卑弥呼
- ② 台与……可能性はある（女性であることは共通）
- ③ 台与の後の男王……秦始皇年に晋に使者を送った人物
崇神天皇（和田萃説）……崇神天皇は318年に死去
「魏志倭人伝」、「記紀」との関係

[主要論点と今後の研究課題]

1. 纏向遺跡の年代

- ・ 纏向遺跡は3世紀のいつ頃の遺跡か、4世紀の遺跡か？
- ・ 庄内式、布留式土器の編年は妥当か

2. 箸墓古墳の被葬者と築造年代

- ・ 箸墓古墳の被葬者が卑弥呼である可能性はあるか？
- ・ 箸墓古墳が作られたのはいつか（3世紀または4世紀？）

3. 邪馬台国の所在地はどこか

- ・ 考古学会で畿内説が主流である理由
- ・ 関川尚功「邪馬台国畿内説否定論」の検討

4. 年輪年代法、炭素14年代法との関係

- ・ 纏向遺跡、箸墓古墳の年代推計に与えた影響
- ・ 日本における年輪年代法の妥当性

5. 近年の前方後円墳研究の動向

- ・ 岸本直文『倭王権と前方後円墳』（2020）の考察

6. 三角縁神獣鏡に関する研究動向

- ・ 福永伸哉『三角縁神獣鏡の研究』（2005）の考察

7. 神武東征等の記紀の記述との関係

白石太一郎『古墳からみた倭国の形成と展開』（2013）

「最近の考古学的研究の著しい進展は、邪馬台国の時代にすぐ続く三世紀中葉すぎには、すでに大規模な前方後円墳が出現していたことはほぼ疑いないことを明らかにした。」

「こうした最近の考古学の研究成果からは、**前方後円墳の出現する直前の三世紀前半の邪馬台国が、北部九州にあったと考えることは、きわめてむずかしくなっている。**」

「最近では、三世紀中葉ないし中葉すぎに巨大な前方後円墳が営まれる**近畿の大和の地が、『魏志』倭人伝にいう「邪馬台国」にほかならない**と考える考古学的研究者が圧倒的に多くなっている。」

「年輪年代法や炭素校正年代法といった自然科学的な年代決定法の進展」、
「炭素14年代の年輪補正の成果は、**基本的には信頼できるもの**ととらえている。」

「画一的内容をもった「古墳」の成立こそが、列島中央部にヤマト政権と呼ばれる広域の首長連合が成長したことを物語る。」

「1980年代の終わりごろから若い研究者たちによって飛躍的に進展した三角縁神獣鏡の年代研究」

「箸墓古墳は、この時期の東アジア世界でも最大の墳丘墓であり、その**被葬者の候補として卑弥呼以外の人物を想定することはむずかしい。**」

福永伸哉『三角縁神獣鏡の研究』(2005)

1920年 富岡謙蔵が三角縁神獣鏡は卑弥呼の「銅鏡百枚」(魏鏡)だと指摘

1920年代に「三角縁神獣鏡」という名称が定着

小林行雄(京都大学教授)による鏡の研究(1950~60年代)

鏡の形式、分布の研究→初期大和政権の成立過程と古墳出現の意義を解明

樋口隆康(京都大学教授、橿原考古学研究所所長)による包括的な三角縁神獣鏡研究

1972 島根県で景初3年(239年)の年号がはいった三角縁神獣鏡が発見される

正始元年(240年)の年号が入った鏡……群馬、兵庫、山口

実在しない景初4年の年号が入った鏡……京都

日本で出土した銅鏡……約4000面

うち三角縁神獣鏡は1割強の520面……3世紀中葉から4世紀の古墳に埋葬

→ 古墳時代出現年代(西暦300年頃)と卑弥呼遣使の年代(240年代)の差(約50年)が問題になった

1981年 王仲殊(中国の考古学者)が三角縁神獣鏡日本製説を指摘

①中国で1枚も出土していない

②神獣鏡は華北では流行せず、江南で盛んに作られた → 呉の工人が日本で製造

← 日本製説は既に1962年に森浩一が指摘していた

福永氏は、銅鏡の中央部の鈕孔(ヒモを通す穴)を調べ、三角縁神獣鏡のうち中国製(魏晋の工人により華北東部で製造)が390面、日本製が130面であり、**三角縁神獣鏡が『魏志』倭人伝の「銅鏡百枚」にあたる可能性が高い**と指摘。

岸本直文『倭王権と前方後円墳』（2020）

前方後円墳は「古墳時代」に10数万基築造される

前方後円墳共有システム……倭国王墓を規範として墳丘規模で序列化

前方後円墳こそ倭国の国家体制を体現したもの

3世紀初頭から6世紀末までの約400年間築造

7世紀に激減し、8世紀に消滅

← 冠位制の導入、制度的な君臣関係の確立

小林行雄「古墳の発生の歴史的意義」（1955）

西嶋定生「古墳と大和王権」（1961）

近藤義郎「前方後円墳成立論」（1983）

石野博信……纏向石塚古墳が最古の前方後円墳と指摘（1976）

寺沢薫……纏向型前方後円墳を提唱（1988）

「三角縁神獣鏡の副葬開始年代は250～260年代にさかのぼる。」

「これまでの考古学的な論証により、**箸墓古墳の年代は3世紀中頃に特定できる。**」

「考古学的な手続きによって導かれる箸墓古墳の年代、それは**247年頃に没した卑弥呼の墓である**ことを指し示している。」

関川尚功『考古学から見る邪馬台国大和説 ―畿内ではありえぬ邪馬台国』 (2020)

1970年以降、50年間、奈良県内の古代遺跡を調査

→『魏志』に描かれている邪馬台国が奈良盆地の中に存在するという説については、どうにも実感がわかない。

それが証明できるような遺物も見当たらない。

大和説自体が大和の実情を検討した結果とはとても思えない。

唐古・鍵遺跡では鉄製品、青銅製品という金属器の出土は非常に少ない。

纏向遺跡は周辺の大古墳群造営のための「古墳造営キャンプ」 (酒井龍一)

崇神天皇の崩年は318年 (古事記の注記による)

大型古墳の出現時期を簡単に3世紀まで溯らせるというようなことは、容易なことではない。

箸墓古墳の年代は4世紀後半より大きく遡ることは考えられない。 箸墓古墳と纏向遺跡の発展は4世紀。

今日では、大和の状況、特に纏向遺跡と箸墓古墳がある程度分かってきた以上、**もはや決着はついた**のではないかと、というのが間近に見てきた著者の立場である。

安本美典『古代年代論が解く邪馬台国の謎』(2013)

箸墓古墳は、竪穴石槨を有する可能性が高く（宮内庁資料による）、「棺あって槨なし」（魏志倭人伝）に反する。

ホケノヤマ古墳からは木槨や小型丸底土器が出土。小型丸底土器は、布留1式期の指標となる土器であり、360年を大きく遡れない。

大和朝廷の成立は280～290年であり、280年頃を境に、日本における鏡の分布は、北九州の内行花文鏡、方格規矩四神鏡から畿内、奈良県の三角縁神獸鏡、画文帯神獸鏡に移り変わる。

神武東遷は280年頃、崇神天皇の没年は360年頃。

安本美典『邪馬台国全面戦争－捏造の「畿内説」を撃つ－』(2016)

寺沢薫氏の「纏向学」は科学の名に値しない

根拠のない思い込みにもとづく妄想、解釈の捏造

ホケノヤマ古墳の築造年代は、炭素14年代法で測っても4世紀。

270年以前である確率は8～9%

寺沢氏は、箸墓古墳の築造年代は270～300年頃であるとしているが（布留0式古相期）、箸墓はホケノヤマより新しい。

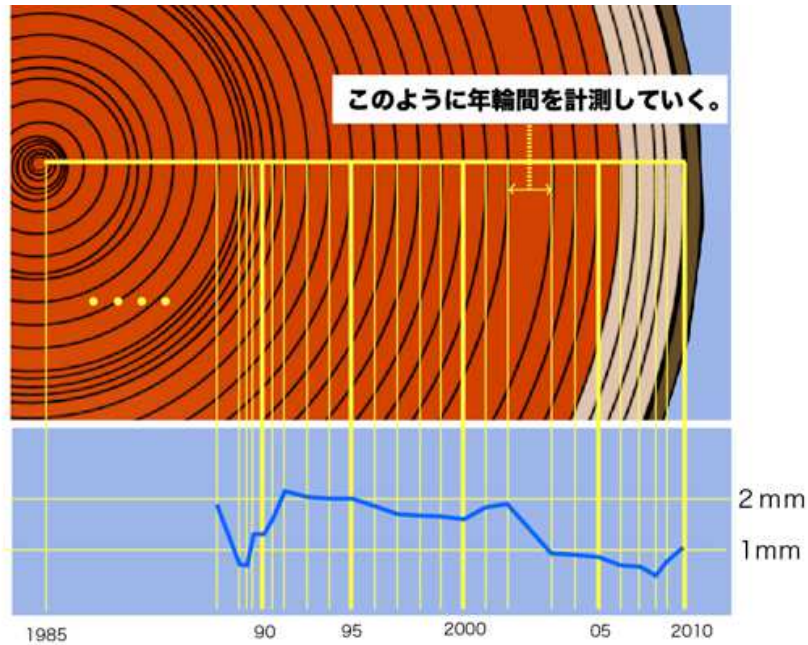
[年輪年代法について]

1. 年輪年代法の形成史

- 1878 ド・イエール（スウェーデン）が氷河末端の湖底層（氷層）による年代推定の方法を開発
- 1901 ダグラス（米国の天文学者）が気象変動パターンと年輪の関係を研究
- 1937 米国アリゾナ州に年輪研究所設立（所長ダグラス）
- 1937 ブルノ・ヒューバ（ドイツ）が指標年輪部を作成（統計的処理）
- 1959 ソ連が年輪年代法研究を開始

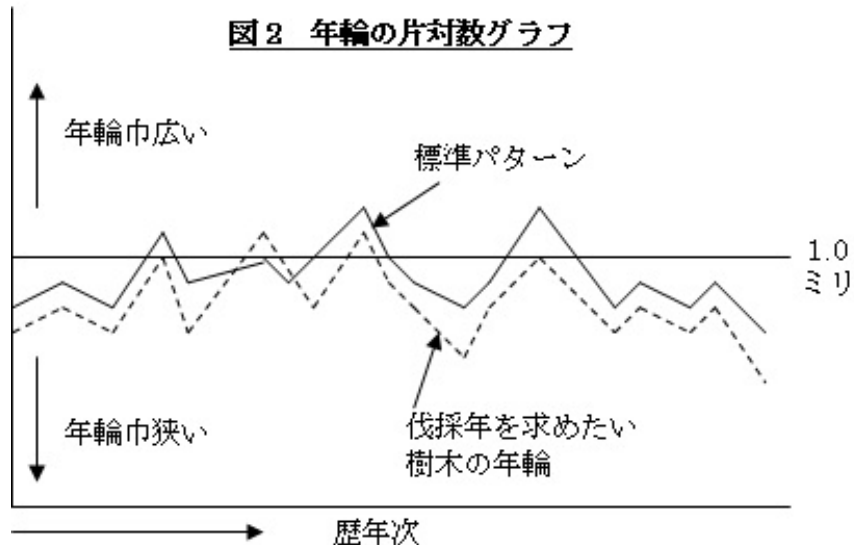
2. 年輪年代法の方法

- ・年輪データ（年輪幅）を計測
 - ← 年輪読み取り機（顕微鏡付き、0.01ミリまで計測可能）
- ・年輪幅変動グラフを作成……片対数グラフ（縦軸が対数メモリ）
- ・標準パターンを作成（15点以上の資料）
- ・個体差を補正……5年移動平均法（前後2層を加えた和で割る）
- ・計測対象資料と標準パターンの類似の程度を計算（相関係数、t検定、帰無仮説）



[光谷拓実]

- 1947 鳥取県で生まれる (現在74歳)
- 1973 東京農業大学造園学科卒
- 1975 千葉大学大学院園芸学科修士課程修了
奈良国立文化財研究所入所
- 1980 年輪年代法の研究を開始
- 1988 農学博士 (京都大学)
- 1990 ドイツハンブルク大学木材生物研究所
に留学 (1年間)
- 1997~2008 京都大学大学院客員教授
(人間環境学研究科)
- 2009~ 総合地球環境学研究所 客員教授
- 2011~ 奈良文化財研究所 客員研究員



3. 日本での導入過程

- 1921 平野烈介が年輪から過去の気象を読み解く研究を行う
→ 1930年代以降、日本でも年輪研究が進展
 - 法隆寺再建非再建論争（西岡秀雄、小原二郎）
 - 日本の歴史研究者は年輪年代法に否定的
 - ← 多雨、地域差、樹種が多い
- 1979 奈良国立文化財研究所の坪井清足所長、佐原真がドイツを訪問し、年輪年代法が年代測定に多く活用されていることを知る
- 1980 光谷拓実を担当者にして年輪年代法の研究を開始
- 1985 紫香楽宮（滋賀県）の年代を特定（742年伐採）
……『続日本記』の記録と一致
東大寺仁王像の年代測定、美術工芸品の鑑定、
円空仏の真贋判定等で活用
- 1985－89 文部省科研費での研究（代表者 田中琢）
- 1990 『年輪に歴史を読む－日本における古年輪学の成立－』（田中琢、光谷拓実他）



4. 年輪年代法による年代測定の事例

- ・ 一乗谷朝倉氏遺跡
- ・ 東大寺二月堂
- ・ 京都鳥羽離宮
- ・ 平城京
- ・ 京都浄土寺
- ・ **応神天皇陵……302年という結果がでる**
- ・ 奈良法華寺
- ・ 清水寺
- ・ 法隆寺五重塔
- ・ その他 多数の文化財等で年代測定を実施



5. 邪馬台国問題と年輪年代法

- 1996 大阪府池上曾根遺跡の大型建物の建造がBC52年と発表
 - …従來說（1世紀後半）より**100年早い** → “**日本考古学史上の大事件**”
 - **邪馬台国畿内説が急浮上**
（←**吉野ヶ里遺跡発見 [1989]**により畿内説は劣勢だった）
- 2008 **国立歴史民俗博物館が箸墓古墳の築造時期を240～260年と発表**
（土器付着物を炭素14年代法で計測）
 - **産経新聞等が「邪馬台国畿内説に軍配」と報じる**
 - **福永伸哉（大阪大学教授）が「被葬者は卑弥呼」と発言**
- 2008 鷲崎弘明「木材年輪年代法の問題点」（『東アジアの古代文化』）
- 2009 鷲崎弘明「炭素14年代法と邪馬台国論争」（『邪馬台国』101号）
 - … **100年遡上説は完全な誤り。基本となる標準パターンの作成時、飛鳥時代で年輪パターンの接続に失敗。「奈良時代～現在」は正しいが、「弥生時代中後期～古墳時代、飛鳥時代の測定値は100年古くずれている。**
 - ← **600～650年頃で年輪パターンの接続ミスの可能性**がある。
- 2011 春成秀爾他「古墳出現期の炭素14年代測定」（歴博研究報告）
- 安本美典「発表はまったく科学的ではない。自分たちの先入観の確認のためにデータを都合良く利用しているだけ。」
 - ← **データの開示がなく、ブラックボックス化**

6. 炭素14年代法

- 1940 「炭素14」を人工的に合成
- 1946 F.リビー（シカゴ大学）が自然界でも炭素14が存在することを予言
→ 観測実験により炭素14の存在を確認し半減期を5000年と推定
……リビーはノーベル化学賞受賞（1960）
- 炭素原子……C12（98.89%）、C13（1.11%）、C14（1兆分の1）
C12、C13は安定的
- C14は放射線（ベータ線 [電子]）を出してN14に変化 [中性子1つが陽子になる]
半減期は5730±40年
- 大気中のC14の濃度は、生成と崩壊がバランスしているためほぼ一定
- 植物は光合成によって大気中のC14を取り込む
（食物連鎖によって動物にも蓄積される）
- この取り込みが停止すると（伐採、死）、C14は崩壊により徐々に減少する
→ 動植物の資料のC14濃度を測定すれば過去の年代が特定できる
- 1980年代に**加速器質料分析法（AMS法）**開発
ウィグルマツチ法（凹凸調整、統計的手法）

放射性炭素

¹²C 空気中で安定
99%を占める

¹³C 空気中で安定
約1%を占める

¹⁴C 空気中で不安定
約1兆分の1を
占める

- ・不安定一物質に含まれる量が減る
- ・地球に存在する割合は、現在も昔も変わらない

放射性炭素年代測定法

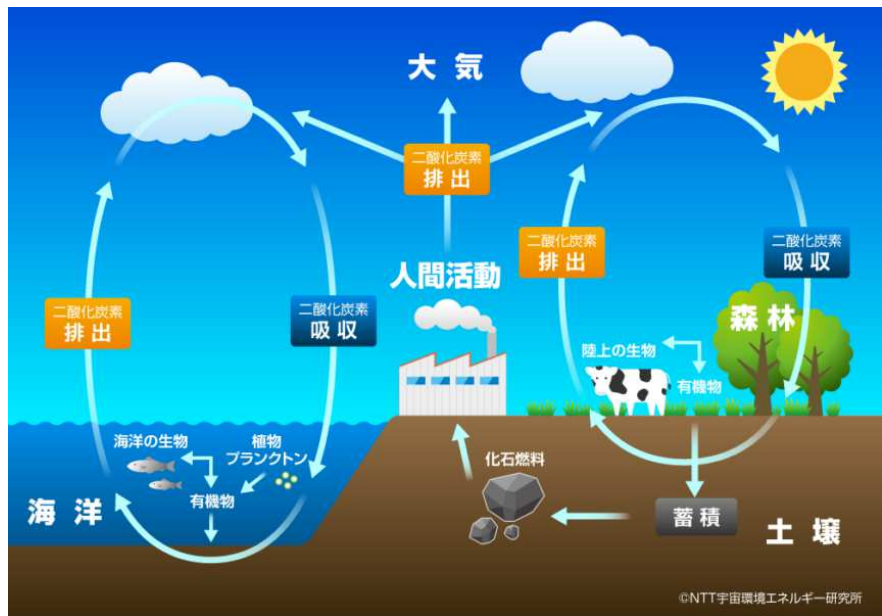
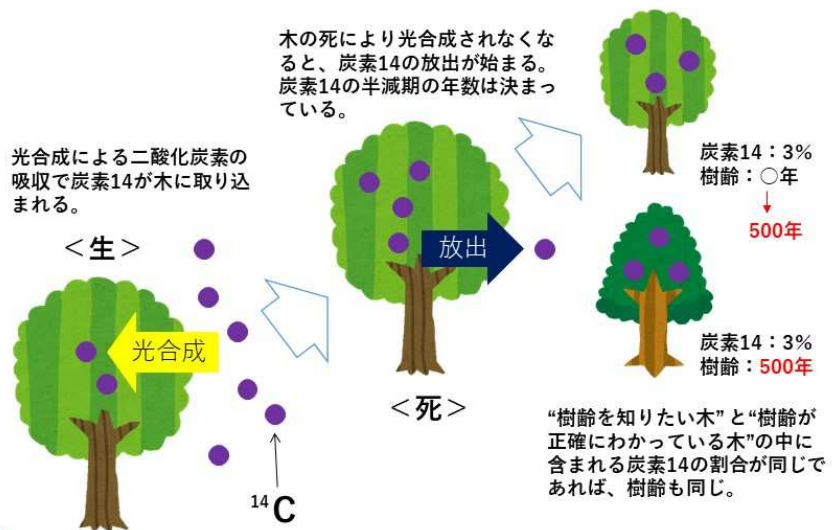
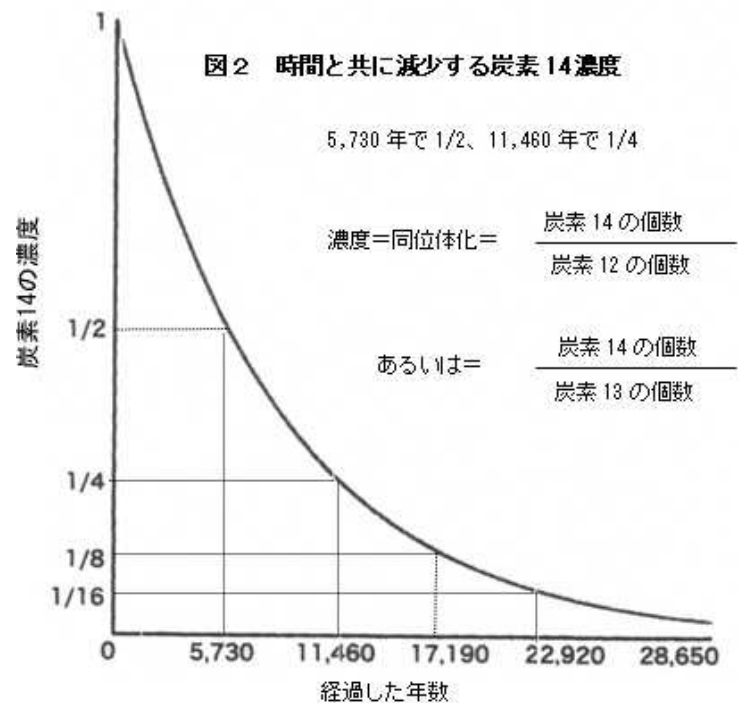
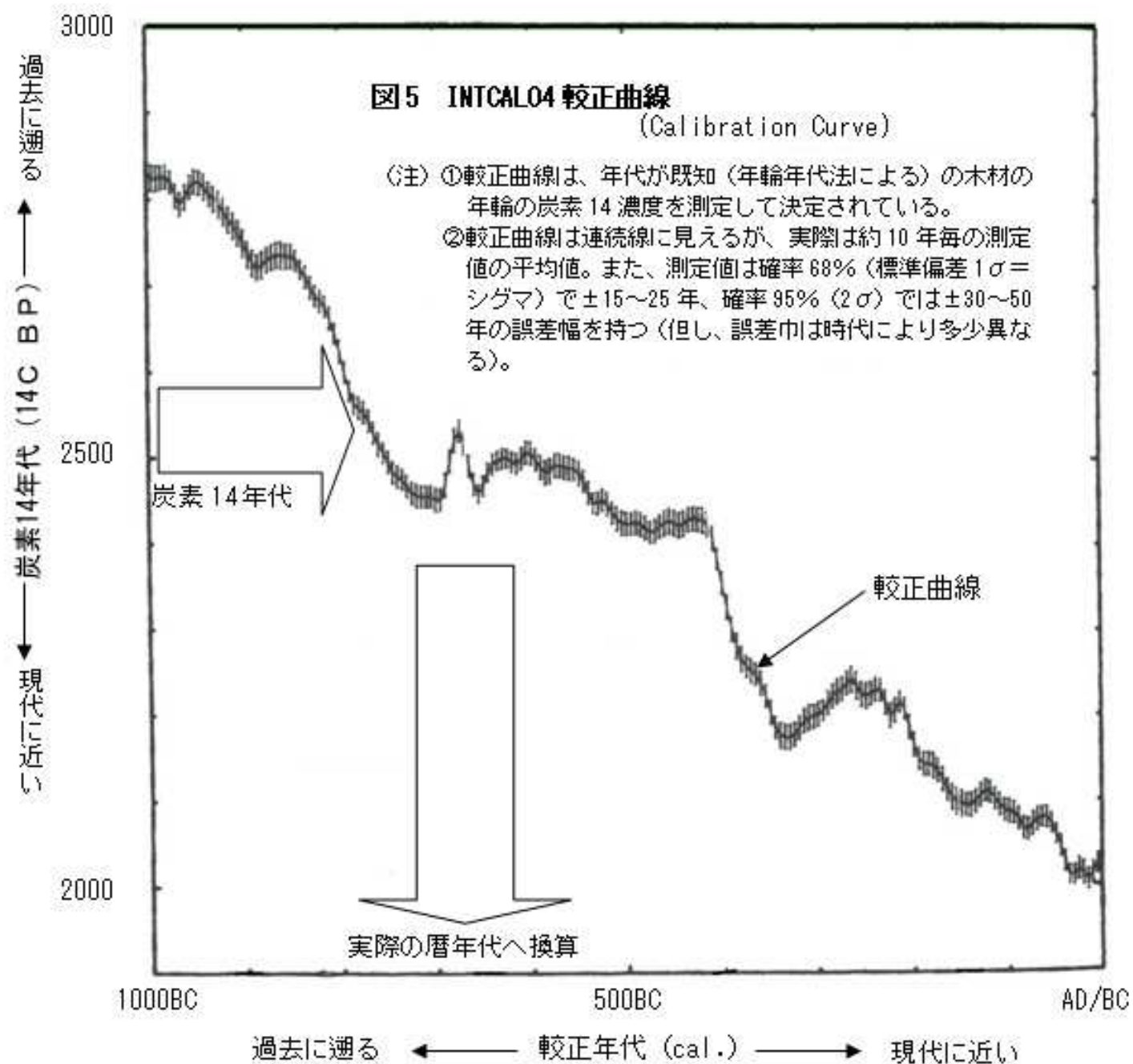


図2 時間と共に減少する炭素14濃度



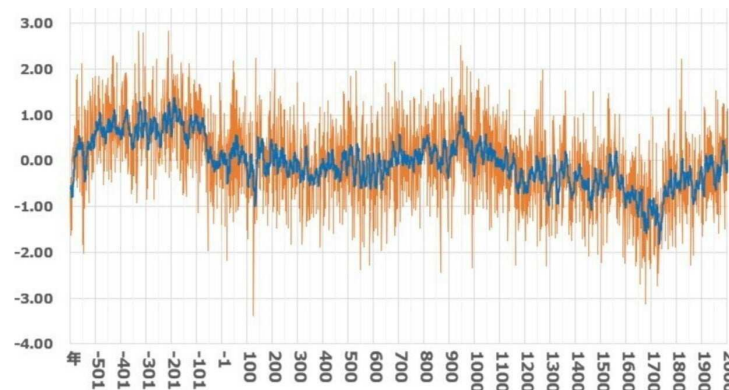
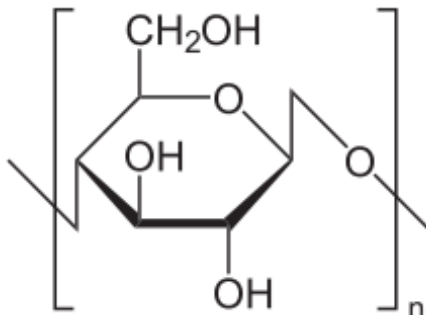
[年輪年代法による較正]

- ・ 太陽黒点活動の影響等で宇宙線の量が変化するため C14 の濃度は変動
 - 各年の C14 濃度を計測（推計）して補正（較正）を行う必要がある
- ・ 樹木の場合、各年輪に取り込まれた C14（セルロース）は年輪間を移動しないため、年輪ごとの C14 を測定すれば、その年輪が形成された年の C14 濃度が推定できる
 - 年輪の C14 濃度を計測することにより炭素14年代を較正（calibration）
 - ← 暦年代と炭素14年代の対応表を国際基準として作成（INTCAL）（98、04、20）
- ・ 較正曲線の作成（縦軸：C14年代、横軸：暦年代）
- ・ ただし、地域差（高度差）、海洋リザーバー効果、核実験等による差異が存在
- ・ 海洋リザーバー効果…海洋中の C14 は大気中より濃度が低く、海岸に近い遺跡の年代測定では古い年代（300～400年）が出る ← 大気からの吸収より崩壊が多い、海洋深層水の影響
- ・ 化石燃料を大量消費した1950年代以降は道路沿いの植物は古い年代が出る
- ・ BC750～BC400は C14 濃度がほぼ一定で出る（350年間）…「2400年問題」
- ・ 3世紀頃にも同様の現象が見られる（「1700年問題」「1800年問題」）
 - = この期間は、較正曲線が緩やか
- ・ 土器付着物でデータが得られているのは全体の 3 分の 1、統計誤差の存在



7. 酸素同位体比年輪年代法

- 酸素にはO16（中性子8、99.76%）、O17（中性子9、0.04%）、O18（中性子10、0.20%）がある
- 植物に含まれる酸素同位体の存在比は年により変動する（その年の気象条件〔降雨、湿度等〕）
 - ←蒸発や拡散の際にO18よりO16から成る水のほうが運ばれやすい（軽い）
- 樹種や個体間の際は大きくない（相関関係）
- 木材の主要成分はセルロース、リグニン、ヘミセルロース
- セルロースはグルコース（ブドウ糖）の分子が鎖状につながった多糖類
- セルロースは丈夫で長持ち、水にも溶けない
 - 一旦セルロースができあがると、そこに含まれる酸素分子は水などとは交換しない（水素分子は水と交換する）
- **木材の年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比を測定し、標準年輪曲線との間で変動パターンの照合を行う → 年輪の年代を特定**



8. 国立文化財機構に対する開示請求

- ・ 2021.7 日本古代史ネットワークが国立文化財機構に対し年輪年代法基礎データの開示請求 ← 2020.10 日本古代史ネットワーク設立
- ・ 2021.9 国立文化財機構が「非開示決定」
- ・ 2022.1 日本古代史ネットワークが東京地裁に提訴
- ・ 2022.3 第1回法廷
- ・ 2022.5 第2回法廷 → これまで10回程度開催（オンライン）

[弥生式土器の編年]

- ・ 昭和10年代に研究が進む
- ・ 1943 小林行雄が近畿の弥生土器を5つの様式に分類
（前期、中期 [3様式]、後期）→ その後、さらに細分化
- ・ 1965 田中琢が「庄内式土器」を提唱（弥生時代と古墳時代の境となる土器様式）
- ・ 1970 佐原編年 前期（BC200～BC50）、中期（BC50～AD200）、後期（AD200～AD300）
- ・ 1979 白石太一郎が古墳時代の始まりを280年頃とする見解を表明
- ・ 1983 シンポジウム「三世紀の九州と近畿」（橿原考古学研究所）
- ・ 1986 寺沢薫が「布留0式」を提唱

寺沢薫「紀元前52年の土器とはなにか

－ 古年輪学の解釈をめぐる功罪」（1999）

池上曾根遺跡……巨大環濠集落

1996 年輪年代法で池上曾根遺跡の建物の建立年代が紀元前52年であると発表
（光谷拓実が柱根を測定）

→土器編年による年代より100年古い

近畿の弥生後期の始まりが九州とほぼ同時期……「弥生の常識を覆した」

考古学者の研究史軽視、身変わりの早さ、危うい状況

柱材の転用の可能性、辺材部の欠落、加算数値（推定年数）の根拠が不明確

「数少ないデータを実年代基準資料として鵜呑みにすることがいかに危ういものであるか」

「考古学的手法による年代観との齟齬は時間をかけてクロスチェックをしていく必要なのであって、現時点で年輪年代法の成果に一方的に転向、依拠することは考古学者としての責任放棄でしかありえない」

山口順久による批判（1996、1999）…年輪標準パターンの作成、照合過程への疑問

白石太一郎「炭素年代法による古墳出現年代をめぐって」(2009)

[日本文化財科学学会特別講演]

2009年日本考古学協会大会で発表された「古墳出現の炭素14年代」(春成秀爾他)を批判

「私は炭素14年代法にはまったくの素人」

「日本の考古学研究者や歴史学研究者がこの炭素14年代の年輪補正による較正年代法の原理をどこまで正しく理解しているのかいささか疑わしい。」

「箸墓古墳は卑弥呼が在世中に大部分を築いた寿陵であった可能性が大きい」と主張するのは問題……論理的に困難

「較正結果の考古学的・歴史学的な利用については、とりわけ慎重な態度が求められる。」

「日本における炭素年代の較正研究の不幸」

「このような研究発表のあり方が、歴博グループの較正炭素年代研究の成果の正当な評価を妨げている。」

「かつて勤務した歴博の元同僚の考古学メンバーの方々を批判する結果になりました。」

設楽博己「AMS炭素年代測定による弥生時代の開始年代をめぐって」(2004)

2003年に歴博が「弥生時代の始まりは従来考えられていたより5百年さかのぼる可能性がある」と発表(日本考古学協会総会、記者会見)

「縄文時代→弥生時代」は採集狩猟社会から農耕社会への移行。5百年さかのぼるとすると、中国の歴史との関係、日本における農耕社会の形成、地域差など根本的に見直しが必要になる」
従来の考古学は**相対編年によって年代を特定**してきた

AMS法……炭化物からC12、C13、C14を分離してそれぞれの量を計測し濃度を測定
β法……資料からのβ線の放射量を分析、ギザギザの線=ウィグル → 較正曲線
海洋リザーバー効果、INTCALが日本で使えるか、測定誤差などの問題がある

[これまでの考古学の実年代決定法]

銅鏡を副葬した甕棺……銅鏡は楽浪郡(BC108年設置)から送られたもの

弥生時代後期の遺跡から出土した銅銭(AD14-40に製造されたもの)

→ 弥生中期を紀元前後の1~2世紀とし、その前後に同様な期間を加算

→ 弥生時代を「BC2~3世紀-AD2~3世紀」とする(小林行雄[1951]による)

→ 定説となり、教科書に書かれた

青銅製武器、磨製石剣 → 白石太一郎は弥生時代の開始を「BC3~4世紀」とする
鉄器の使用開始時期との整合性

「「定説」なるものがどのように生まれてきたのかを常に自覚的に問い直す必要がある。」

→ 「弥生時代開始年代問題は前・中期旧石器問題を他山の石とすべき」

[設楽博己] 1956年群馬県で生まれる。静岡大学卒、筑波大学大学院博士課程修了。国立歴史民俗博物館考古研究部、駒澤大学を経て2010年より東京大学考古学研究室教授(現在は名誉教授)。

中塚武『酸素同位体比年輪年代法』（2021）

「日本において高度に発達してきた土器編年研究には、客観的に見るといくつかの問題点が指摘できる。」「3世紀の日本の土器形式と考えられている庄内式や布留式土器の存続期間が暦年代・絶対年代として定まっていなかったために、いつまで経っても邪馬台国や卑弥呼の存在時期との関係で各地の遺跡の年代を正確に議論することができない。」

「年輪年代法の利用にあたっては、日本各地の考古学者や古建築学者が日常的にその手法を使って発掘・調査した遺跡出土材や古い建造物の木材の年代を、自ら明らかにするというような段階には、未だ達していない。」

「過去3000年に及ぶ年輪幅に関する標準年輪曲線の構築は、真に称賛に値する、世界でも抜きん出た研究の成果であったと言える。」

「奈良文化財研究所では、この作業に光谷拓実氏を筆頭とするわずかな人数が取り組み、短期間でそれを完成させた。……しかし、この作業が極めて少人数で行われたためかデータの全貌が国際的な学術誌に論文として公開されることもなく、そのまま年代決定だけに利用されているという状況が今日まで続いてしまった。このことが、このマスタークロノロジーに基づく年輪年代の成果に対する、さまざまな論議を巻き起こす原因の一つになったと思われる。」

「膨大な作業を一手に引き受けていた光谷氏らにとっては、データの国際的な学術誌での公開は、日本の考古学とは全く異なる理系の学術的基準での審査を受けなければならないという意味で、そこに十分な時間を割くエネルギーは残っていなかった、というのが実情だったのではないだろうか。マスタークロノロジーの構築と応用は、それほど大変な仕事であったと推察できる。このようなクロノロジーの構築と利用、公開に関わる、ある意味でアンバランスな事情の背景には、日本の年輪年代学が置かれている世界の中でも少し特殊な事情がある。」

「その中では、批評者の個人的思惑から全くの憶測に基づき、多数の年輪年代データの中から自らの学説に都合がよいデータだけを取捨選択するような態度も助長してしまった。」

「この背景には、……十分な数の研究者、研究機関を確保できない状況のもとで、学生も含めた後継人材の育成もままならず、最大の貢献先である考古学の関係者からも困難な状況が理解されず、年輪年代決定のニーズだけが継続的に与えられて、多忙な状況が収まらないという、悪循環があったとも思われる。……それらのことが、マスタークロノロジーの公開に対するハードルをさらに高くしてしまった可能性もあるのではないだろうか。」

「絡み合った問題の糸を解きほぐすことが必要」

若井敏明『邪馬台国の滅亡－大和王権の征服戦争』（2010）

「三世紀の日本列島に存在した倭国は女王、卑弥呼を戴く北部九州の地域的なまとまりであった。大和政権が日本列島の大部分を統一するまでは、各地に地域的な王権が存在した。」

「大和政権がその支配領域を格段に拡大した崇神・垂仁・景行の三代の間、王宮を営んだ地が、現在の奈良県桜井市、三輪山の麓に位置する纏向であった。」

「軍をひきいてやって来たのは大和政権の王タラシナカツヒコ、そしてその後オキナガタラシヒメ、のちの仲哀天皇、神功皇后であった。」

「このときの九州遠征は大和政権による統一事業のいわば締めくくりだった。」

「山門の攻略をもって畿内大和政権の九州遠征が完了した。」→ 邪馬台国の滅亡（367年）

【若井敏明】 1958年奈良県生まれ。大阪大学卒、関西大学大学院修了。関西大学、佛教大学非常勤講師。

小林敏男『邪馬台国再考』（2022）

「ヤマト国が北九州（女王国）と畿内ヤマト（邪馬台国）に二つあった。」

「四世紀中頃までには畿内の邪馬台国は北九州の女王国を打倒し朝鮮半島に進出していく。」

「魏志倭人伝にみる邪馬台国は畿内ヤマトである。」

「三世紀中盤から後半段階のヤマトは王統十代の崇神天皇、十一代の垂仁天皇に時代であって、九州の女王国（ヒミコ、イヨ）と併存し、ときには対立した関係にあった。」

「伝承的には十二代景行天皇の時代に、九州の女王国は滅び去ったと思われる。」

【小林敏男】 1944年長野県生まれ。神戸大学卒、東京教育大学博士課程修了。大東文化大学名誉教授。